
SkyCityStories-W-DarkHeroMAX&ILL

BlackWolf

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SkyCityStories - W - DarkHero MAX
& ILL

【Nコード】

N8174I

【作者名】

BlackWolf

【あらすじ】

風都の姉妹都市、空都

空の如く様々な顔を持つ街には、何もかも有り、何もかもが変わっていく。

人の運命でさえも…

「『忘れるな、お前の罪は消えない。』」

「俺の罪を消してくれ…」

闇に生きる二人の男達の先に、何が待っているのか？

仮面ライダーWの設定を一部共有していますが、オリジナルのキャラやライダー、ドーパントだらけで、本作のキャラとの絡みは無い予定なので、見る人は注意して下さい！！

第0話「飛び出すAノクレイジー度はMAX」(前書き)

具体的には、言えないんですが…

コチラの作品は一応、エグザスと世界を共有しています。

登場キャラのコラボ予定は無いけど、本筋に関係があるんで(^|

^:|)

第0話「飛び出すAノクレイジー度はMAX」

ここは、空都…

風で有名な街、風都の姉妹都市である。

だが、風力を有効活用するエコな風都と違い、空都には綺麗な空、汚れた空、という相反する二つの空を持つ…

この街は、空の天候の様に常に様々な顔を見せる。

何でも有る街、誰もが集まる街、何もかも起こり得る街、言い替えれば、どんな悲劇も起こる街。

風都の姉妹都市であるのだから、ガイアメモリだって流通している。むしろ、この街にこそ、ガイアメモリの悪事が溢れているだろう。

しかし、この街にも仮面ライダーは居る。

ヒーローと言えるのかは、解らないが…

空都市街、公由タワービル内

鉄の厚い壁が、殺風景で広いフロアーを作っている。

中には二つの異形…

一つは、古代鯨を模した形のメガロドン・ドーパント。

もう一つは、仮面ライダー。

紅い複眼で、額にX字の角を持ち、胸、肩、肘、腕、腿、膝、脛等のいたる所にAやMの意匠が有る。

右半身が薄緑色、左半身がガンメタルカラー、全身に電子回路のような模様が入り、拳と足の周りに白い装甲を纏う。

腰には、4つのメモリが刺さったスロットを持つX型のバックルの金のベルト。

二つの異形は、永らく闘っているが、メガロドン・ドーパントの繰り出す、猛烈な勢いを持つ攻撃。

それを前に、ライダーは苦戦していた。

すると、腰のバックルの左右、上下のスロットの間に有る取っ手を引っ張った。

MAXIMUM - DRIVE!! AERO!!

電子音に合わせて4つのスロットが伸び、バックルが紫電を纏い、ライダーの眼が光る。

風の衝撃波を纏った拳や、蹴りを無数に繰り出す。その全てが、メガロドン・ドーパントに殺到し、ドーパントは爆発。

メモリが壊れ、廃人に成った男を余所にアナウンスが室内に訝する。
「素晴らしい！これは、成功作だ！」

部屋に有ったゲートが開かれ、黒服を来た男が部屋に無数に入ってきて、その中の一人が、疲労困憊の相を呈するライダーの前に立つ。

「実験は終了だ。変身を解きたまえ。」

「残念だ。テメエ等は、たった一つのやり方を間違えたんだぜ！」
言うや否や、素早い蹴りを繰り出して、黒服を一気に数人薙ぎ倒す。

『こんな事して、タダじゃ済まないぞ！』

ライダーが、先程とは少々違う声音で、独り言を放った。

「バカ言うなよ。全部お前のしたかった事だろ？俺が代わりにしてやってるんだ！それに、ワザと手を抜いて闘うなんて、しっかり演技して仕込んだのは、そっちだろ？お前の方が随分と、たちがワルいぜ！」

そう言う間にも、ライダーは部屋を出て、走りながら出口を探す。

PHARAOH!

突然に、ガイアウイスパーが聞えてきた。

ビュオツ！

と思ったら、橙色の光球が飛んできたので、間一髪避けると、壁に大穴が空いた。光球が飛んできた先には、宙に浮かぶ金色のドーパント。ファラオの格好をし、背中に並ぶ二本のオベリスクから、真横に生えた黄土色の石の翼。

大穴が空いた壁から見える、深夜のビル街の景観を背後に浮かぶそれは、恐ろしい迄に神々しい…

「腰のソレは言わずもがな、お前自身も我が公由家の所有物だ！逃げる場所も無いだろう。モルモットは直ちに檻に戻るが良い！」

コイツは、自分の力を過大評価していやがる。無駄に威厳を込めようとしている男だろう。

その自信が、いったいどこから漲ってくるのか？大仰しく叫ぶ男を見ていると、薄ら笑いが堪えられない。

「ククツ、ハハハツ！」

「無礼者め、何がおかしいんだ？」

男が自分の滑稽さを理解した事など、人生では一度も無いのだろう。小馬鹿にするつもりで、男に一言向ける。

「追いかけてこれるもんなら、ついてこいよ。」

ッドーーーーーン！

ふいに爆発音：

下の階層からだ。

男には予想外だろうが、俺にはそうでもない。

「何事だ!？」

男が動揺した、その隙を付いて壁の穴から飛び降りる。

「馬鹿な！ここは地上数百mの超高層ビルだぞ！」

公由タワービルから、一つの影が暗闇に落ちて、空都の夜空で月明りに照らされた。

「ヒヤハツ、悪魔は何だつてするぜ！」

両目の紅き複眼が、何かの信号の様に明滅している…すると、爆音を響かせる黒い影がビルの下層から浮上、降って来たライダーを上に乗せると、そのまま運び去っていく。

住んでるマンションへの帰り道、遠くでビルの壁が燃えている。

「あそこは確か、公由のところか！あれはヒドいなあ。待てよ…、明日の仕事が貰えないかも！？」
ちよつとシヨックだ…

こんなに騒がしい事件が起ころうとも、空都の空は驚く程に静かで、大きな喧騒ですら、通り雨と等しく、明日には雲一つ無い空の様に、全てが忘れられる。

全てを奪われても尚、空都を出ようと思った事は、一度も無い。この街で育った人間は、この街を出て生きてはいけない。

俺はソレを痛感しているから、下らない生き方であろうと辞められずにいる…

不意に空を横切る影！

バイクと航空機を混ぜた様な、白黒の飛翔物体。

その上に立つ二色の異形…

俺は、確かにソイツと目が合った。

「Wか？……いや、違うか……ドライバーや所々が、異なっている。」

疑問が次々と湧く俺に対し、「お前の存在に興味は無い。」そう言わんばかりに視線を逸らして、猛スピードで去っていくライダー。

俺みたいに裏社会で生きてる奴は、仕事柄そういう情報を目にしたりする。

例え、謎に包まれた風都の超人であろうが、園咲のガイアメモリの産物ならば…

その姉妹都市の空都、園咲の姉妹グループの一つの 公由財閥

この街の裏でガイアメモリを造り、売り捌く…そんな、怪しい連中に尻尾を振って仕事を貰う俺が、知っていて当然なのだ。

ましてや、俺も特殊なドライバーを使い、ガイアメモリの超人と化するならば、尚更に…

明日になって空都の空が変わっても、俺は今日の夜空を忘れないだろう。

「今日の出会いに乾杯しようじゃないか。兄弟！」

独りきりの夜道で、男は思わず叫んだ…

第0話「飛び出すAノクレイジー度はMAX」(後書き)

一話のプロローグを元にしてますが、序章としては長いかもしれな
いですね f ^ | ^ ;

第1話「飛び出すAノシンのシャドウ」(前書き)

説明が多いと読み辛いと思います。申し訳ありません…

第1話「飛び出すAノシンのシャドウ」

喫茶「BLUE・WAVE」

この物語の主人公は、テーブルでコーヒーを啜っている渋谷系の若者で、なくて。その青年にケーキを運んで来た。エプロンを付けてる店員の方。

「はいっ！おまちどーさまですっ！」

若者は絶句した。

普通にしていればクールでカッコいい青年が、無理矢理に飛び切りの笑顔を作った様な顔をしてきて…。まあ、とても愛想の良い店員なのだが、目茶苦茶オーバリアクションで困る。

「ああああ、シン！そっちは、良いからこっち来いよ。」

カウンターから、アフロヘアがトレードマークの、この店のマスター、鈴木が店員を呼んだ。

「あっ！またやっちゃったんですか！スイマセン！ホントにスイマセン！」

シンと呼ばれた青年は一層謝る。

「バカ、まだ営業中だ。」

そう言いながら、頭をゴシゴシと掻くマスター。

「ただいまー！」

元気な声が店内に響き、快活そうな女子高生が入って来る。

「おお、良いところにきた。玲、店についてくれ！」

似ても似つかないのだが、今帰って来た女子高生は、鈴木玲。つまり、マスターの娘である。

「え〜？…、仕方ないなあ。解った！良いよ。」
少し渋ったが、結局了承すると、二階の部屋へ着替えに上がっていった。

「シン。店の事は良い！今日は下がれ。」
マスターは、ニッコリと笑うと裏手を指した。

「はい！有り難う御座います！」
店の裏に入り、この季節には不似合いなロングコートに着替えて外に出る。

「マスターは、こんなボクを拾ってくれたのに、ボクは何も出来やしない…。玲ちゃんには怖がられてるし。」

数ヶ月前、何故かこの店の前で倒れていたボクは、マスターに助けられて店に居候させてもらっているのだ。

覚えているのは、駆け寄って来たマスターに名前を聞かれた時に、朦朧とした意識で「シンだ。」と言った事だけ…

実際には、もう一つ覚えている事が有るが、ソレについては余り触れたくないで隠している。

「あゝ、今日もツイてないな。明日こそちゃんとやらないと!」
とか言いながら、行く当ても無く街をさ迷う…

路地の向こうに、目を真つ赤に腫らした燕尾服の男が居た。

「…借金を返さないと…ウチの楽団が…」

(ヤバツ、目え合っちゃったよ!)

根拠は無いが、自分の心と身体が危険サインを放っている気がする。

「イヤだ〜っ!」

思わず、その場から走って逃げ出す!

「待てよ!俺を助けてくれよ!大人しくすれば、危害は加えないからさ!」

男は血相を変えて、必死に僕を追って来る。

「なんで?なんで僕が!」

多分、あの男は僕を狙ってる。理由は…

きっと、僕の事を狙ってる奴等に脅されるかなんかしてるんだ。
けど、捕まりたくなんか無い。

警察に行って助けて貰わなきゃ。そう考えながら街中に向け走って行くが…

「ああ…アアアアッ！待ってくれって言ってるだろおっ！クソがあっ！」

ORCHESTRA！

男の声による電子音が響いた事に思わず振り返るなり、さっきまで警察にどうにかしてもらおうと思っていた気持ち達が途端に砕け散った。

そこには、先程の燕尾服の男では無く、身体中から様々な楽器を生やした怪物が立っていた。

「逃がさない…、殺してでも捕まえてやる！」
右腕に無数に伸びている管楽器から、衝撃波が飛んで来る！

「うわあ！こんなのを人が沢山居る場所に連れてったら、大変だ！
なんとか衝撃波を避けながら、街の外へと走る。

「チイツ！大人しくサツサとくたばりやがれ！」

「ああああああああああっ！」

必死に追って来る怪人、オーケストラ・ドーパントの追跡を振り払う為に、シンは郊外の廃工場に隠れた。入り口に入るなり、懐から赤褐色の双眼鏡の様な物、「キャンサーゴーグル」を取り出し工場内を覗く。

(工場の中は、暗くて見渡しが悪い…、これならアイツの目をやり

過ごして撒ける！)

「どこだ！どこに隠れやがった！」

後から入って来たオーケストラ・ドーパントは、ちまなこに成って周囲を見渡す。

「くう…ヒヒツ！隠れたって無駄だぜっ！！」
オーケストラ・ドーパントが突如全身を震わせると、身体中の楽器が音色を奏で出した！

「うう、なにコレ？頭が痛い。割れそうだ！」
思わず声を出してしまっただが、ドーパント自身の出す音の大きさにかき消された。

「この演奏なら、どこに隠れようが関係無い。早く出てこいよ！そしたら止めてあげるさ。このまま死にたくないだろ？」

(あのドーパントは、破壊音波で僕を殺すつもりなんだ。でも、出たとしても殺される！どうせ、あの人はメモリに吞まれてる…)

シンは迷っていた。これから自分がどうすべきか…

「残念だよな。オレも君も、公由に目を着けられたばかりに…、君はオレに殺され、オレは君を殺さなければいけない！」
ドーパントが、狂った様に叫ぶ。

「イヤだ！死にたくなんかない！」

目一杯叫んだシンは、懐から四つの機械を取り出し、三つにメモリを差し込む。起動音を立てながら、三つのガジェットツールがライヴモードに移行する。

そして、唯一ライブモードにしなかったガジェット「ドルフィンインカム」を装着して叫ぶ。

「ドラグナー！フライト、テイクオフ。」

「なんだ？なんだ？」

異変を察知したオーケストラ・ドーパントが辺りを見渡すと、蛍型の「ファイアポインター」が強烈な閃光により視界を遮った！

「グウツ！クソツ！目が、目があつ！」

すかさず蛇型の「スネークロープ」が足元を掬う。

「おわあつ！？」

ドーパントが倒れ込んでいる所を見計らって、蟻型の「アントガン」が鉄骨の山を縛っているウインチを噛み切り、ドーパントの上に柱の雨を降らせる。

「ギャツ！…少し甘くしてやったら、調子に乗りやがって。ブツ殺スー！！」

「アレを置いて来たのが、あだになっちゃうなんて…」（来るのを、待つしかないか。）

ドーパントが、しばらく動けないうちにシンは、工場を中心へと走る。

「もう邪魔は入らねえぜ…」

ガジェットの奇襲をなんとか退けたオーケストラ・ドーパントが、シンに迫る。

『ターゲットポイント、チェックイン。ネクストコマンド…、アクションスタート。ファイア!!』

突然聞こえた飛行音と電子音声、それに続く大きな機械音と共に、廃工場の中心に火柱が立った。

「な…。」

度肝を抜かれて立ち尽くすドーパントには、破れた天井越しに白黒の飛行メカが見える。

「殺らなきゃ、殺られるんだろ…」

(あの人は間違いなくメモリに吞まれてる。仕方ないんだ!)
半ば諦めに似た表情で、シンは自分に言い聞かせた。

「メモリを使うよ。」

実に刹那げに、そう言うつとインカムを外した。

『OK…、シュート!』

マックスドラグナーからシンへ、無数のメモリが射出される。

「久し振りの…、悪魔の力。」

受け取った全てのメモリを眺め、忌々しげに呟くとロングコートに殆どをしまった。

手に握っているのは、3つのメモリ。Aと書かれた薄緑のメモリ、Cと書かれたガンメタルカラーのメモリ、Kと書かれた白いメモリ…

「これから何が起ころうが、決して僕のせいじゃない。」

ロングコートの腹元をめくる。金色で下方に四つのスロットが伸びた「MAXドライバー」が腰に巻かれていた。

その形は、Mの様にもAが二つ並んでいる様にも見える。

正面から見て左内側のスロットには、Hと書かれたピンク色のメモリが既に刺されている。

白いメモリを起動させる。

KNOCK!! KICK!!

二つの音声が同時に鳴る。これ一つで「拳打」と「蹴激」の記憶を司るメモリは、極めて珍しいというか、試験的な意味合いの強いメモリだが、動作はあの夜に保証済みだ。

その、メモリをピンクのメモリの反対側に刺す。

続けて、左手で薄緑色のメモリ、右手でガンメタルカラーのメモリを起動させる。

AERO!!

CHASE!!

両腕を交差させ、それぞれを左右の外側のスロットに刺し、そのままドライバーが象った歪なMの端を上にはね上げる！

内側のスロットも連動してスライドして、金色のドライバーはXを象った。

両腕はスロットをはね上げた勢いのまま、目の前で交差している。

AERO!!! - CHASE!!!

ガイアウィスパーと共に、周囲の空気が僕に集まり風が揺らぐ。黄色い光が身体の周りから飛び出しては弧を描いたり、そのまま空気の層に戻って来る。

一際大きい光が螺旋を描いて天に飛び出すと、そこには…

薄緑色の右半身とガンメタルカラーの左半身を持つ、複数のガイアメモリによって生み出された悪魔、「仮面ライダーMAX」が佇んでいた。

「こつという汚れ役は、やっぱり俺様かよ。」

シンが、先程とは打って変わった乱暴な口調と、低い声で呟く。

(僕は知らない、止めたって君がやるんだろ。)

シンが、先程の声で心の中に呼び掛ける。

MAXに変身するとシンの身体のコントロールは主に、シンに眠る暴力性を表わすもう一つの人格、「シャドウ」の物に成るのだ。

「どうせアレだろ？このドーパント、人として墮ちかけてるんだろ？今まで散々何やったか知れたもんじゃねえ…、俺はコイツを蹴散らせば良いんだよな！ハハツ！こんな時でもないと表に出れないからなあ！好きにやらせて貰うぜ！」
シャドウが昂ぶる。

（まただ。なるべく戦わない様にしてるのは、コイツの気違いじみた所、要は僕の内面の醜さを見せつけられる。だから嫌なんだよコイツは…）

シンは、このもう一人の自分の粗暴さに常日頃から、嫌気が刺していた。

「おっと、忘れるところだった。いつもの付き合えよ相棒！これくらい良いだろ？」

シャドウがシンに催促をする。

（ああ…）

半ば諦めて要求を呑む。

右半身を向けながら伸ばした右腕、その握り拳から一本出した人差し指を、真直ぐ相手に突き付ける。

「『忘れるな、お前の罪は消えない。』」

そう言って左向に一回転すると、指で形作った銃で右側頭部を撃つマネをする。

さつきからずっと、呆けていたオーケストラ・ドーパントは、慌てて身を正す。

一瞬感じた恐怖心を払う為に、大きく叫ぶオーケストラ・ドーパント。

「舐めるなよ、クソ餓鬼！」

ドーパントが右手の管楽器から破壊音波の衝撃波を打ち出すが、それを難無く躲すシャドウ。

「セイツー！！！」

物凄い速さでドーパントに近付き、間髪入れずに両手の掌打で胸を打つ。

「ハツー！！！」

吹き飛んだドーパントの後ろに先回りし、更に右手で頭を鷲掴みにして地面に叩き付ける。

「ヒヤハハツ！最高だな？おい。」

シャドウは、心底楽しそうだ。

「ぐっ、ハアツ。オオオオオオオオツ！！！」

最大限に身体を震わせて破壊の旋律を奏でるドーパント。

しかし、マックスは一向に怯む気配が無い。

近付かなければいけないのかと、左手の弦を高周波振動の刃として切り掛かるが、マックスの手に軽く捕まれる。

「な！？、どういう事だ？」

「お前の攻撃は多分、オレ様には効かねえんだよ！！！」

「大気の記憶」を持つ「エアロ」のメモリの力が見えない空気の膜を作り、音波をマックスから逸らしているのだ。

「ヒ、ヒイツ！」

必死に逃げ出そうとするドーパント。

だが、シャドウはソレを逃そうとしない。

「まだまだ！終わりじゃねえよ。」

宙に蹴りを数発放つと、エアロのメモリの力で全てが空気の塊に成つてドーパントに向けて飛んで行く、それは「追跡の記憶」を持つ「チェイス」のメモリにより、残らず命中する。

「こんなに離れているのに、何故かわせない？」

オーケストラ・ドーパントは、完全に退路を見失っている。

「オレ様は狙った獲物にやあ最期まで食らい付くんぞね。ま、もう御遊びにも飽きてきたし、そろそろお終いだぜ！」

バツクルの上下のスロットの間に有る左右の取手を引っ張る。

MAXIMUM - DRIVE!! AERO!!

電子音に合わせて4つのスロットが伸びる。バツクルが紫電を纏い、両眼が赤く光った。

「『エアロストーム!!』」

宙に放たれた無数の拳打や蹴撃が、風の衝撃波を纏って獲物に襲いかかってくる！

オーケストラ・ドーパントが攻撃を躲そうとしたが、どの一撃も起動を変え、最期には必ず命中する。

止どめとばかりに放った左右の回し蹴りは、放たれた光の螺旋が竜巻を描き、飲み込まれドーパントは爆発した！

「終わったな。呆気ねえよ！！」

メモリブレイクされて倒れた男を、冷ややかに見下ろすシャドウ。

（もう、充分だろ？早く元に戻ってよ。）

「へいへい。自分で戦わねえくせに俺には強気なんだなあ？ご主人様よお！」

と、言いつつも変身を解いて引っ込んでいくシャドウ。

「ふう…いつまでこんな事が続くんだろ…疲れた。お家に帰ろう」と…」

ゆっくりと家路を歩むシン。

公由家

高級住宅が建ち並ぶ一等地に建てられた空都一の豪邸。その邸宅の一室、豪華なインテリアが並べられた室内に二人の男性。

ベージュのスーツを着た身なりの良い20代後半の男と、フォーマルな格好のどこか飄々とした青年。

「資料を見た通りだ、コレが我が公由グループいや、「ノア」が風都のWを模して作り上げた今世紀最大の最高傑作！特殊なドライバ―と4本のガイアメモリを使って変身する通称、MAXだ。」
男は机の上の書類を指しながら青年に説明を続ける。

「これは大変素晴らしかったよ、ただ、残念な事にね…。実験体として管理していた装着者、ソイツが生意気にも、性能実験中に逃亡してねえ。」

凶悪そうな笑みを浮かべるシンの写真、それは実はシャドウなのだ
が…、男はそれを憎々しげに眺めながら、あの夜の事を思い出す。

「で、そのまま行方が掴めないと。崇仁さん、俺にそんな強力な奴を捕まえると？」
青年が聞き返す。

「ああ、その通りだとも！我が社に不利益を及ぼしたり不穏分子に成る恐れがある、ガイアメモリの所有者の始末は今まで通りに続けてほしいし、MAXを回収した暁にはそれ相応の報酬を約束しよう。それに君の方が戦闘に慣れてる上にアイツは体中をいじくられてる！いつガタが来てもおかしくないよ。君のイルだってMAXとは互角な筈だ。」
男は自信に満ち溢れた顔で告げる。

「話は概ね解りました…。では、また後程…。」
そう言っつて部屋を出る青年。

青年が部屋を去ってから暫くして、崇仁も部屋を出る。目指すは屋敷の大広間。

そこには三人の家族、厳密には四人だが…と、一人の執事が待って

いる。

「崇仁、遅いぞ。」

入るなり、公由財閥の重役であり、四兄弟の長兄でもある光一の冷やかかな言葉と共に、鋭い視線を送られた。金のストライプの入った黒いスーツを着て、長いテーブルの中央の席に座る光一は、まだ30代の半ばだというのに、威厳と貫禄に満ち溢れたオーラを放っている。

「すまないね兄さん。ちょっと用件が立て込んでいてね。」

（事なかれ主義の冷血漢め、人が来るなり御小言か。）
おずおずと弁解を述べているが、内心では不満を感じている崇仁。

「光一兄さん、責めないでやって下さい。」「崇仁兄さんは、後始末が色々有って大変なんですよ。」

頭から凄く細い傷跡が一直線に下まで、身体を真つ二つにする様に伸びている青年が、顔の半分を使って交互に喋る。

黒に近い緑色のスーツを着た、愛想は良さそうだが、一見薄気味の悪い青年は三男の「半蔵」。本来は双子で左右別々の人間なのだが、とある事故が原因で、この様な身体となってしまうのだ。

「あら、お兄様。それにしてもヒド過ぎやしませんこと？今日は里花お姉様が居りませんからわたくしが代わりに言わせてもらいますけど、あの様な下働きの者をあてにするなんて！公由の者としての誇りに欠けるんじゃないやありませんの？」

緑のドレスを着て黒いカチューシャをした女の子、兄弟の末っ子の「沙都子」がキツイ口調で次兄である崇仁をなじった。

「うるさい、子供は黙ってる！」
治まりがつかなくなった崇仁は、もはや激昂している。

「まあまあ、皆さん落ち着いて…、折角の昼のティータイムなんですから。こんな所、旦那様が見られたら悲しみますよ。」
白スーツを着て光一の斜め後ろに立つ青年が、柔らかな笑顔を浮かべながらみんなを諭す。

公由家の執事「入江魁」である。

彼は、この家の執事であるのだが、昔からもつぱら光一の秘書の様な側面が強い。

「そこまで言うのなら仕方あるまい。父様の顔に泥は塗れんしな…」

崇仁が落ち着きを取り戻し席に着いた事により、ティータイムを冠したノアの会合が始まるのであった…

公由家からの帰り道、先程崇仁の客人であった青年こと、ワタリウツル渡移は、姉妹グループである園咲の作ったWを参考に、ノアが生み出した「イルILL」の装着者であるが、イルがノアの満足する結果を出せなかった為、嚴重に管理される事も無く、移が協力的かつ賞金稼ぎである事を考慮し、崇仁に始末屋として雇用されているのだ。

(マックス、それがアイツの名か。まさかあの日に脱走したなんて…、奴ならもしかしたら…)

そう思いながら、移は自分でも気付かずに笑みを浮かべるのだった。

第1話「飛び出すAノシンのシャドウ」（後書き）

なんか、MAX目茶苦茶強そうに書いてしまいました。

W、ゴメンm（――）m

あと、話の展開がちょっと…

公由家のくだりと戦闘シーンを入れ替えた方が良かったかどうか悩みましたが、自分としてはノアの面々のインパクトが強いのと、準主人公にしては移の出番が少ないので、後に回しました。

第2話「追跡者I/ライダーを追って…」(前書き)

久しぶりの更新です。

後書きでは、今回登場するもう一つの主人公ライダーIELLの、この話にはまだ出てない設定も一足早く載せてます!!

第2話「追跡者Eノライダーを追って…」

報告書

MAX脱走事件による我が社の損失は、以下の通りである。

タワービル18階及び地下3階の破壊

社員二十数名が重軽傷

マックスドライバー及びメモリ多数と随伴指令機マックスドラグナーの強奪

奪われたメモリは、エアロ、フロスト、インフェルノ、チェイス、バリア、エクステンドのベーシックタイプ六種に加えノック&キック、ジャベリン、ガン、ソードのウェポンメモリ四種、ハートとロードのサブメモリ二種

尚、逃亡被験者は「二名」

以上、損失の概略とする。

200x年x月x日

君由タワービル警備責任幹部

君由崇仁

「崇仁、この報告書はなんだ？」

薄暗い室内で闇に溶け込む様な黒いスーツを着た初老の男が、豪華なチエアーに深々と腰掛けながら書類を読んでいた。この君由家の家長でありノアの首領に君臨する君由鬼キイチロウ一朗である。

「父さん、どういふ事ですか？おっしゃる事の意味がよく解りませんが…」

崇仁が平静を装って父親に話し掛ける。

「18階を吹き飛ばしたのは、お前だな。挙げ句の果てに極秘開発中のライト、ダーク、サイキックの三点のメモリまで持ち去られたな？お前には失望したぞ。ワシの目を盗もうなどと下らん事にはかり知恵を回しおって…」

ほとほと愛想が尽きた様な態度を取る鬼一朗。

「と、父さん待って下さい！そ、その事についてはですね…」

「隠し事など、「ライブラリジャック」の前では無駄だ。お前の様なバカ息子にはキツイ御仕置が必要な様だ…」

鬼一朗は懐から、鼻から顎までを覆う不気味なマスクを取り出すと顔に着け、一本のメモリを起動させた。

ABYSS!!

「ヒッ、ヒューッ！」
情け無くただ叫ぶ崇仁。

バタンツ！！

THUNDER！！

突如部屋の扉が勢い良く開くと、メモリの起動音が聞こえるのと共に眩い閃光が、鬼一朗と崇仁の間に割って入った…

「お父様、それくらいにしといて下さい。崇仁の事は私が長兄としてしかるべき処置を下しますので。」
崇仁には光で前が見えないが、それは紛れもなく兄の光一の声である。

「光一か…お前がそこまで言うのなら、許してやらん事も無い…
ただし、崇仁が担当する社の仕事は全て御前が監督しろ。」

いささか不服気ではあるが、メモリとマスクをしまい踵を返して部屋を去る鬼一朗。

光が収まると、そこにいつもの光一が立っていた。

「崇仁よ、つまらない嘘をつくからこういう事になるのだ。自分で自分の首を締めてどうする？」
軽蔑のまなざしを弟に向ける兄。

「相変わらず眉一つ動かさずに喋るんだな兄貴は…、そうやって御機嫌取りはうまくこなして、さぞかし父さん自慢の息子だろうっ！」

崇仁はそう言って強く歯噛みをする、壁を拳で強く殴った。

「空談社」情報局

空都の大手出版社である空談社が発刊するゴシップ雑誌、空耳スク
ープズの中堅ルポライターソノノシヤの一人、空野晋矢はデスクで暇を持て余
していた。

ブルルルルルッ…

突如電話が掛かって来たので受話器を取ると、聞き覚えの有る声が
聞こえてきた。

「もしもし、シンヤさん？俺です。ワ・タ・リ、ちよいとお願いが
ありまして…、探して欲しい人間と調べて欲しい噂が有ってね。
後で会えます？」

相手は空野の知人で、空都の裏社会ではそこそこの名売れている男
だった。

「ちよいと待ってくれよ。丁度腹が減ってんだ！唇ピツタシにレス

トラン「ひこうき雲」で良いかな？話はそれからだ。」

「ええ、構いません。では、お待ちしてます。」
そう言つて渡移が電話を切つたのを確認すると、空野はガツツポーズをした。

あの男は気前が良いし、口は堅いから安心して情報を売れる。何より、食事を奢ってもらえるのが堪らないのだ。

空都署

ここ空都署の刑事課は、管内で多発するガイアメモリ関連の犯罪で非常に多忙なのだ。

「カシワバラアツ！捜査は根性だけじゃ、どうにもならねえんだよ！！デスクもすっかりこなさんかいっ！」

そう言つて係長デスクで叫んでいるヤクザの様に恐ろしい警官は、ノンキャリアから叩き上げで警部にまで上り詰めた岸谷朗^{キシタニアキラ}。

「係長、柏原への話はそこらへんで…今日は新入りも来てるんで、紹介とかも有りますし。」^ト

知的な雰囲気サイジマを漂わせる西嶋巡査部長が岸谷を宥めて柏原を自分のデスクに戻らせた。

怒られていた若手警官の柏原教輔が、西嶋に頭を下げる。

「スイマセン、ほんと迷惑ばっかかけて。」

「そう思うなら仕事でしっかり取り返すんだな、巡査長殿。」
笑って柏原の肩を軽く叩く。

「失礼します!!」

室内に響き渡る声、その方向へ目をやると、背が高くハーフの様な顔立ちのハンサムな青年が立っていた。

「この度、空都署刑事課に配属になりました城田勝^{シロタマサル}巡査です!」
大声で氏名階級を叫ぶと、刑事課の皆にしっかりと敬礼をした。

「西ちゃん!お前と柏原の所で城田の面倒を見てくれ。」
岸谷は西嶋班に城田を預けるつもりだ。

「でだ、西ちゃん。仮面ライダー事件の捜査はどうなってる?」

レストランひこうき雲

「仮面ライダー事件？」
渡が首を捻った。

「2色では無いが、角の生えた緑の超人は頻繁に目撃されてる。単なる連続事件の一つに過ぎないが、警察にとってドーパントは目の上のたんこぶだろうな。」

オムライスとハンバーグ定食を食い尽くした空野は、ナプキンで口を拭いながらアングラな話題を続ける。

「空都の住人達の混乱を避ける為にガイアメモリの存在をひた隠しにしているのに、ドーパントの犯罪が減らなければ効果は無い。今、マスコミの一部は報道規制を無視し始めている。いつまでも人の口に戸は立てておけないって事だよ……」

「で、警察がどういふ情報を掴んでいるかは、お解りなんですか？」
デザートのメニュー表を空野に差し出す渡。

「ああ、それくらいはね…確か犯人がよく現われるのは、ツムシカゼ旋風地区
で……」

旋風地区

一台の覆面パトカー、車内に三人のスーツの男が座っている。西嶋、柏原、城田だ。

「犯人は決まって風の強い日に犯罪を起こすんだ。理由は良く解らんがな……」

西嶋は助手席に座って、遠くを見つめる。

「で、狙われるのは、煙突の有る工場ですか。」
真剣な表情の城田。

「……俺は犯行の動機は大気汚染だと思う……」
覆面パトカーから見える大量の化学ガスを吐き出す煙突、それを忌々しく眺める柏原。

「気持ちは解らないでもないがな。」
昔の街を知る西嶋には、今の空を見ると無性にやり切れない気分になる時がある。

旋風地区化学繊維工場

工場内に不法に侵入した怪しい男は辺りを憎々しげに眺め、懐から出したガイアメモリを起動した。

GRASSHOPPER!!

シャツの裾を捲し上げて、土手っ腹にある生体コネクタに突き刺す！
みるみるうちに形を変えていく男の体。

男の姿は、真っ赤な複眼に額から生えた二本の触角、緑の皮膚に発達した脚を持つバツタを人型に変えた様な怪人、グラスホッパー・ドーパーントへと変貌を遂げた…

「この街の空を汚す者共に仮面ライダーの裁きを！！」

工場の中で無茶苦茶に暴れ回るドーパーント、人や機械を見境無く襲う。

「トウツ！ライダーキック！！」

一際大きい機械に蹴りを加え爆発させた。

渡移

空野から情報を仕入れた俺は、次に事件が起きるであろう工場に愛用のマシン「ロードワイルダー」を走らせていた。

コイツは一応貰い物だけど、フロントの一本角とリアの六気筒のマフラーに、車体の前部が白、後部が黒の単色なのがカッコいいと思っただけだ。

で、そんな事を考えながら工場に辿り着くと案の定、そのバツタ男が工場内の機械の上に偉そうに居たわけだ…

「少なくとも俺の本命では無い様だ。でもグラスホッパーのメモリの購入者は、始末者リストに載ってはいるな…」
溜め息混じりに呟く。

「お前、どっから来た？ 仮面ライダーに裁かれないのか？」
俺に気付いたバツタ男が馬鹿な質問をしてくる…

「この際だ！ 一つ言っておく。お前は仮面ライダーなんかじゃない、仮面ライダーは俺だからだ！！ 裁くのは俺だっ！！」

俺は懐からスロットが上下に伸びた銀色のバツクル「イルドライバ」を取り出し、腰に当てた。

ベルトが伸びてイルドライバーが装着されるのを確認して、俺は懐から出したQと書かれた無色のメモリとQと書かれた茶色いメモリを起動させる。

ZERO!!! QUAKE!!!

ゼロのメモリを上のスロットに挿すと更に押し込み、クウエイクのメモリを逆手に持ち替え下のスロットに挿す。

「変身…」

右手で下のスロットを左側に曲げる。上下に縦一文字に並んでいたスロットが、下のスロットが曲がった事によりバツクルがLの字を象り、バツクルから溢れた白と茶の光が俺の周囲を囲む。

白の光が先に全身を包み、白の異形の姿へと変貌させる。
灰色の複眼、額に赤いクリスタル、そこから真上に伸びた長い角と左斜め上に伸びた角、肘とアキレス腱から伸びた刃、拳と足の爪先に五つづつ生えたスパイク

次に茶色の光が全身を包み、全身にヒビを思わせる模様が無数に刻まれ、茶色のラインが体の各部に入る。

Z E R O - Q U A K E ! !

左右の複眼が赤く輝き、E.L.L.の基本形態、「虚無」と「振動」の記憶を司る戦士、ゼロクウェイクへの変身が完了した。

不意にその手を引つ込め拳を握ると、左手で顔を覆って何かから目を逸らす様に顔を背け呟いた。

「俺の罪を消してくれ。」

「はあ？御前が裁くんじゃねえのか？」
すかさずツツコミを入れてくるドーパント。

「まあ、お望みならやってやるぜ。」
凄まじい跳躍力で殴り掛かってくるドーパント。

だが…

ガギイツ！！

「フエツ！？」

間抜けな声を上げ、顔をひしゃげるドーパント。

気を取り直して、脚力での加速を活かしたキックやパンチを四方八方からイルに繰り出すが、ギリギリで躲かれてキツイカウンターを見舞われる。

それもそのはず、ゼロメモリの虚無の記憶により無駄の無い素早い動きをとれるイルには、グラスホッパー・ドーパントの大振りな攻撃が当たる筈も無く。クウエイクメモリの振動の記憶により増幅された攻撃が、ドーパントに痛烈な一撃を与えるのだ。

「ぬあつ!!」

敗色が濃厚と感じたドーパントは逃亡を企て、イルから距離をとる。

「あんまし、ちょこまかしないでくれるかな…」

そうやってドライバーの左のスロットを倒すとクウエイクメモリを引き抜き、Mと書かれた半分ずつ赤と青の色をしたメモリを差し込み、スロットを跳ね上げた。

ZERO - MAGNE!!

ヒビと茶色のラインが消え去り、全身が赤と青の二色に染まった。

フォームチェンジが済むと、両手を空を掻く様に振るう。

「は？」

工場内を飛び回るドーパントには、イルが何をしているのか理解出来ないだろう。その身に何か起きるまでは…

突如、工場内の機械等が無数にドーパント目掛けて飛んできた！

咄嗟の事に避けられず、鉄骨や様々な物にぶちのめされるドーパント。

「磁力」の記憶を内包するマグネメモリにより磁気で操られた金属製品が、グラスホッパー・ドーパントを苛む。

「報酬は頂きだ！」

マグネメモリを引き抜いて、再度クウェイクメモリを差し込む。

ZERO - QUAKE!!

素早く先程のフォームに戻る。

「さ、メモリブレイクだ。」

あまりに余裕なので、少し気取ってみる。

すかさず、クウェイクメモリの入ったスロットを更に跳ね上げ、バツクルをレの字にする。

MAXIMUM - DRIVE!! QUAKE!!

バツクルに青い電撃が走る。

「クウェイククラッシュ！」

ドーパントの懐に飛び込んで来たイルが、エネルギー光を纏った両拳でドーパントの脇腹を挟む様に殴る。

殴られた場所から全身にヒビが入っていくドゥームに、その場から獲物の顎を狙って両足を揃えて蹴りを繰り出し、そのまま後ろ宙返りをして着地した。

爆発するドーパント。

一仕事終わったとばかりにリラックスするイル…

「しかし、奴じゃなくて残念だな。」

西嶋

工場が騒がしくなったので、柏原と城田を伴って現場に駆け付けるとそこには…

仮面ライダーが居た、事件の噂とは大分かけ離れた姿だ。

よく見ると、壊れたガイアメモリと廃人同然の男が一人…コイツが今回の犯人なのか？

「テメエ、よくも俺達の手柄を横取りしやがったな！！」

「先輩、本物相手じゃマズいですよっ！」

城田が慌てて取り押さえるが、柏原は今にも飛び掛かるとする剣

幕だ。

「部下が失礼した。犯人逮捕の協力で感謝する。」
直ぐ様ふたりの間に入って礼を述べる。

「別に感謝されたくてやつてる訳じゃない、自分の為だ。先に来た所で、君達じゃ話にならない。」

そう言うと仮面ライダーは、前部が白で後部が黒のバイクに乗って走り去った。

「クソ野郎、ふざけんじゃねえっ!!！」

柏原は、ライダーが見えなくなってもまだ叫び続けている。

「自分の為にドーパントと戦う? いったい何故なんだ…」

奴を目にしたその時から、様々な疑問が尽きる事は無かった。

第2話「追跡者Eノライダーを追って…」(後書き)

仮面ライダーE

ノアが、単体で二つのメモリの力を引き出す為に造られたライダー。Wがソウルサイド、ボディサイドに別れているのに対して、イルは特性を半身に分けておらず、通常のドーパントの様に全身をボディサイドとし、ソウルサイドの能力を後から付加する事で、均等に全身に行き渡らせている。

その為、元来のソウルサイド、ボディサイドという表現は不適切である。

名前の由来は、下のスロットに挿したメモリの発動が全身を病が侵していく様だからという事。

・メインメモリ

ゼロ 「虚無」の記憶

ワイルド 「凶戦士」の記憶

ビジョン 「狙撃手」の記憶

オーバー 「逸脱」の記憶

・サブメモリ

クウエイク 「振動」の記憶
マグネ 「磁力」の記憶
トリック 「奇術」の記憶
ニュークリア 「原子」の記憶

ゼロメモリは、この作品の構想時はヴァイオレンスだったので、第1話を掲載する前にテレビで出ちゃったので変更しました。

・マシン

ロードワイルダーは、車体前方部を換装する事で様々な状況に合わせた戦闘を行える。

ブレイクワイルダー 機首にブレード、左右にチェンソーを配した追加装備

ガンナーワイルダー ミサイルポッドやキャノン砲を持つ砲撃形態
ガードワイルダー 前部ホイールの左右にシールドを持つ、防御及び突貫形態

ドリルワイルダー 前部にドリル、前輪がキャタピラという地中潜行形態

エアワイルダー レーザー砲を持つ空戦形態
ダイブワイルダー マシンガンを備える水陸両用形態

エボルギャリー

ロードワイルダーの六個のユニットをリボルバー型のプラットフォームに内蔵する。

車体前部よりプラットフォームフォームを設ける事で、エボルギャリを盾にしながら後方から突入しての安全な換装と、前部が変形した力タパルトからの迅速な発進が可能となっている。

第3話「追跡者I / 偶発的遭遇」(前書き)

久々の投稿です。

後書きはライダーやドーパントの解説をしていきたいと思っています。

第3話「追跡者I / 偶発的遭遇」

BLUE・WAVE

今日は店が定休日だという事で、店内は静けさに満ちている。

「今日は久し振りにピクニックでも出掛けるか、みんなで!!」
マスターの鈴木は上機嫌でキッチンに立ち、お弁当を作り始めようとした。

「それサイコーですね!こんなに天気の良い日だし。ピクニック大好きですよ、ボク。」
満面の笑みを浮かべて、マスターを手伝おうとキッチンにやってくるシン。

「わたしパス!」
ソファアでくつろいでいた娘の玲が即効で否定した。

「…ちよつとちよつと、なんでだよ?」
玲の近くまで寄って行ったマスターが、耳元で囁く。

「だって、あの人も行くんでしょ?なんか苦手なのよ、いちいち大袈裟だし。優しそうだけど本当は何考えてるんだかよく解んない。しかも、ちよつと怖い…。なんか不気味っていうか。」
父の耳元で不安気に語る娘。

「考え過ぎだつて…、な、ピクニック行こうよ。」

マスターとしては、難しい年頃の娘が血縁者でも無い男と、一つ屋根の下で住む事に対する抵抗が有るのは解らなくも無いが、身寄りの無い青年を放っておけないのだ。

そんな微妙な空気を察してか、シンはキッチンから出てくるところで言った。

「あ、ボク、用事が有るんだつた！アハハ！やゝ、残念だつたなゝ、ピクニック行きたかつたなゝ、じゃ、夕飯までに帰つて来ますんで！」

そう言つて家を飛び出して行つた。

「あゝあ、シン行つちまつた。アイツああ見えて敏感なんだよ…、お前も少しは歩み寄つてあげても良いんじゃないか？」

「…私だつて、居候がウチに来てから色々我慢してるもん…」

そう言つた娘に、マスターは何も言えなかつた。

永光荘
エイコウ

渡移は、現在最大の標的である仮面ライダーMAXの所在が掴めず、

自室で悶々としていた。

「これと言った情報は特に無し。やっぱり、このままドーパントを風漬しにするしかないのか…」

そう呟き、手元のガイアメモリ所有者の始末者リストに目を落とす。

ふと、何かの頭の奥底に引っ掛かった…

「なんだ？この違和感…。知ってる奴も知らない奴も随分色んな奴が居るが…」

今迄に何体ものドーパントを倒して来たが、始末者は次から次へと湧く為に資料は定期的に新しい物を貰っている。

ある男の欄に目が止まる。

『メモリの破壊確認、よって要注意者登録解除。』

「俺が始末していない奴…、じゃあ、誰がコイツを倒した？」

一瞬考え込んで再び資料を見返す。念の為に取ってある今迄の履歴も全部含めて…

「いる。何人も…、そりゃあ他の始末屋の仕事かもしれないけど、調べれば他にも…」

奴の潜伏する地域が絞り込めるかもしれない。

「待つてるよ兄弟…」

そう言うと、いつの間にか怖いくらいの笑みを浮かべていたのが自分でも解った。

青空ヶ丘、私有地

ここは空都有数の自然公園。その一角に有る立ち入り禁止区域を歩く人影が二つ。

「光一様、今日の視察は以上で終了で御座います。」

「そうか、今日は早く仕事が片付いたな。では屋敷に帰ってランチとするか…」

白いスーツを着た執事の青年と、金のストライプの入った黒いスーツを着た主人。

入江魁と君由光一である。

「ただ、その前にだ。コソコソと隠れてないで出て来たらどうかね？」

草むらに呼び掛ける光一。

すると、そこから中年男性が飛び出して来た。

「空都を汚す害虫、君由一族め！」男は光一に罵声を浴びせると、一本のメモリを取り出し起動させる。

BEAR!!

そのメモリを左手の指の付け根に有る生体コネクタに突き刺す!

「グオアアアアッ!」

男は、全身を茶色い体毛に包んだ熊の様な怪物、ベアー・ドーパントへと姿を変えた。

「ふん、痴れ者め! わざわざ光一様の御手を煩わせる迄も無い。我が主には指一本たりとて触れさせはしない!」

魁は前に一步踏み出ると、右手の白手袋を外す。その手は機械と化していて、ガイアメモリのコネクタが付いていた…

CLAW!!

メモリを右手の甲に突き刺す。

白い光が現れて恐竜の化石の様なラインを身体に描く、更に骨格標本に肉付けをする様に緑色の光が全身を包んでいく…

白いスーツの青年から肉食の中型恐竜の様な怪人へと変貌すると、身体に至る所から鋭い爪が生えて、その身はクロー・ドーパントへと姿を変えた。

「この身を潤す糧と成れ…」

爪を擦り合わせ舌舐め擦りをするクロー・ドーパント。

「ガアアアツ！天誅！」

両腕を振り上げ飛び掛かるベアー・ドーパント。

二つの怪物は激しくぶつかり合い、互いに傷付け合う。

大地を抉る剛腕！鋼鉄すら引き裂く鉤爪！

しかし、パワーのポテンシャルでは拮抗していても、スピードに関しては断然ベアーが劣っている。

次第に翻弄され始め、ベアーの繰り出す一撃は、鋭い爪を伴う当て身を返されて命中する事が無い…

「どうした？下賤なケダモノめ。」

微塵の容赦も無い冷徹な爬虫類の嫌らしい目付きが、地に伏したベアー・ドーパントを見下ろす。

「俺がこの街を守らねば！」

自分に言い聞かせる様に叫ぶと、渾身の力を込めてクロー・ドーパントに突っ込む！

「貴様の様な輩は、今迄にも数えきれぬ程いたよ…」

せせら笑うクロー・ドーパント。素早く身体を回転させ、嵐の様に切り掛かる！

勝負の結果は明白だった…

無数の爪に全身を引き裂かれて蹲るベアー・ドーパントに、両手の爪にエネルギーを溜めて光の刃を伸ばすクロー・ドーパント。

たちまち爆風と共にベアー・ドーパントは跡形も無く消え失せる…

「ただし、生きて帰った奴は見た事が無い…、不思議な話だと思わないか？」

変身を解除すると、大地に残る焼け跡に向けて呟く魁。

「お前も趣味が悪いな…」

主人は溜め息混じりにそう言った。

空都署

仮面ライダー、神出鬼没の謎の怪人。

少なくとも、ドーパントとは一線を画す存在…

この空都署には、数々のドーパントの目撃談が寄せられる。中には仮面ライダーに関する事も…

ただ、様々な情報が入り乱れてなかなか全容を掴む事が出来ない。

けれど、つい先日。私は出会ったのだ！仮面ライダーに…
部下達と共に。

「何考えてるんですか、西嶋さん？」

書類に向き合うフリをして考え事に耽っていた俺に、柏原が話し掛けてきた。

「この前の事ですか？」

「ああ、まあな。なあ、柏原…あの仮面ライダーが言った事、どう思う？」俺は柏原に率直な意見を求めた。

「どうって…、奴の事なんて解りませんよ。ただ、他のドーパントをわざわざ倒してるなんて相当な目立ちたがりやなんじゃないんですか？」

典型的な直感型の警官である柏原はここぞという時は頼りに成るが、普段の捜査での意見は余り参考になりそうにない…

「すみません、自分も良いですか？」

俺達の話聞いていたのか、奥から城田が話しに加わって来た。

「自分の為に戦う、そうっておきながら実際は他人に害を与えるドーパントを倒す。その矛盾した行為には二つの仮説を立てられると思うんです。」

城田には何かしらの自信が有るのだろう、言葉に淀みが無い。

「解った、続けてくれ。」

「一つ、単純にそのドーパントが邪魔である。或いは、そのドーパントの始末で何らかの利益が得られるという事。もう一つは、人々に感謝されたい。英雄に成りたい。」

「そりゃあ、一つめじゃねえのか？二つめの仮説とか、なんだよそれ。なら、もつと愛想良く目立つ様にやりや良いだろ？」

「しゃくに障ったのか、柏原は難癖を付けだした。」

「まあ、待て。二つめのそれじゃあ、俺達にわざわざそんな事を言った意味が無い。普通は隠すべき事だろ？」

「ええ、それが気になるんですよ。」

深く考え込む城田。

「どーせ、その内に自分一人じゃ何も出来なくてウジウジと悩んだ挙げ句。ピーピー泣いて助けを求めらるんですよ。」

柏原にいたっては考える事を放棄したようだ。

「奴は、自分でも無意識に助けを求めている？感謝や称賛とは違う何か…、善行を重ねる事の意義。」

何かを掴もうとしている気がする。

「この街で今時そんな事を考えてるのは、早く出所したい犯罪者くらいですって。」

柏原が茶化す様に言った。

「ああ、それだ。奴は…何かは知らんが、許されたがっている…」

その時、何故だか俺は、そう確信したのだ。

空都モール

シン

空都有数の商店街を沢山の人々が、消費や献身という行動を取る為に各店舗を埋め尽くしている。

そんな中、僕はやる事や行き場も無くただ幸せそうな人々を眺めて溜め息をつく。

悲しい？寂しい？

そんな事、本当は微塵も思っちゃいないだろうに…

「全部まやかし、錯覚だ。」

そう呟いて、普段から肌身離さないコートを捲ってMAXドライブに挿さった桃色をしたハートメモリを眺めやる。

ふと、雑踏の中を見ると嫌な予感がした！

辺りに目を凝らす。

フォーマルな格好をしているがほんの少しだけ剣呑な雰囲気をする青年に目が止まる…けど、違う!？

じゃあ…

移

頭をフル回転させる事に疲れて気分転換に街へ繰り出した俺は、空都モールの雑踏に意味も無く流されていた。グイーツ！！グイーツ！！

アンテナである触角をガイアメモリの探知レーダーとしても機能させている俺の通信ガジェット「ホーンドフォン」がシグナルを鳴らし始めた。

「どこだ？」

コイツが鳴るのは数m圏内で誰かがガイアメモリを起動しようとしている時、つまりこれからドーパントが現れようとしているって事だ。

「こんな街中で大層なマネするじゃないの。」

TREE！！

俺が言うや否やメモリの作動音が聞こえた。

シン

TREE！！

ガイアメモリの作動音が聞こえたと思ったら…

僕が見ていた人の数m後ろに居た血色の悪そうな中年男性が、自分の腕にメモ리를差そうとしていた。

「危ない！！逃げて下さい！！」

僕は危険を察知して、周囲の人達に大声で叫ぶ。

その間にメモ리를挿した中年男性は、見る見る内に無数の葉と枝に身を包んで、木の化け物、ツリー・ドーパントへと姿を変えた。

僕の叫びの意味や、周りの騒ぎに気付いた人々は次々に逃げ出す。けれど…

「お前、どこかで…」

そう呟いている。

僕が最初に警戒した青年は、僕の言葉を理解していないのか、僕を見たまま少し固まっている。

そんな風に突っ立っている間に、その場に一人残ったその人にドーパントが木の枝を束ねた腕を振り降ろそうとしていたので、僕は突っ立ったままの彼を守るべく飛び込んで突き飛ばした。

「危ないですって！」

「ああ…」

この期に及んで、なんて抜けてる人なんだろう？

そう思いながら、変身して戦わなければいけない状況が来た事に僕は煩わしさを覚えてしまった。

「なんで…こうなるんだよ。」

そう言いつつも、MAXに成ろうとメモリを取り出そうとした時だった！

「不意打ちなんて…、趣味が悪いねえ。でもアンタはツイてないよ…俺に襲いかかるなんてさ！」

その人がツリー・ドーパントにそう言うと、何やら上下にスロットの伸びた銀色のドライバーを出して腰に装着した。

通常のガイアメモリよりも僕のメモリに似た。無色のメモリと茶色のメモリを取り出してドライバーに差し込んでいく…

ZERO!! QUAKE!!

ドライバーの形がL字に変わった時には、その姿は白い身体に茶色いヒビが入っているというデザインの戦士になった。

扱うメモリは4本には及ばないが、複眼やボディフォーム、ドライバーのデザインから、ドーパントとしての能力もMAXに酷似しているであろう事は明らかだった。

その罅割れた戦士は、まるで宙にある何かを掴む様に右手を突き出すと、直ぐにその手を引っ込めて左手で顔を覆いこう言った。

「俺の罪を消してくれ。」

移

「さて、お仕事だ。」

イルへの変身が完了すると、俺は目の前のドーパント目掛けて走った。

「お前、俺の邪魔をするつもりか!?!」

ツリー・ドーパントがそう言って伸ばした両腕の無数の枝が、イルへ一直線に向かう。

「ちまちまやるのは、効率的じゃあないな!?!」

ゼロメモリを抜いて、同じ色をしたWと書かれたメモリを起動させる。

WILD!!

それを上のスロットに差して押し込む。

WILD・QUAKE!!

手足のスパイクが消え去り、両手の拳に長く立派な鉤爪が3本ずつ生えてくる。

両方の複眼がやや吊り上がると、「狂戦士」の記憶を内包するワイルドメモリにより、パワーに特化したワイルドクウエイクへと姿を

変え終えた。

「こんなモン叩き斬ってやるぜ!!」

一心不乱に爪を振るって、ドーパントに肉薄する。

ともすれば攻め手が単調になる狂戦士の記憶と振動の記憶の組合わせだが、目の前の邪魔な小枝を切り払うには打って付けだ。

「チイツ…」

攻撃が通用しないと解ったドーパントは、大地に手足の根を張った。たちまち無数の根が大地を這い、埋め尽くすと共に、急速成長を遂げて大樹になる。

「バカめ!! 貴様もすぐにペチャンコにしてやる!!」

声高々に叫ぶ巨大なツリー・ドーパント。

「あゝあ、面倒臭い事しちゃって…」

大した危機感も無く、ホンドフォンを操作するイル。

「まあ、近いのが救いか。早速、お早い事で…」

ブオオオオツ!!

轟音を響かせながら突っ込んで来る白い巨大な四輪車。

赤いフロントキャノピーに白いロングホーン、その後ろに群青色のリボルバー型プラットフォーム。

それは「エボルギヤリー」、イルの専用バイクであるロードワイルダーを輸送、換装するための移動式プラットフォームである。

フロントキャノピーが左右にスライドし、一本角型のロングホーンが前面に倒されると、リボルバーの中央に座すロードワイルダーが見える。

だが、その前部は黄色いボディに巨大なドリル、前輪代わりに二本のキャタピラが左右付いたおよそバイクとは言い難い様相を呈していた…

「お楽しみはこれからだ。」

スロットルを全開にしてエボルギヤリーを飛び出すドリルワイルダー。

次の瞬間にはキャタピラは地に着いたままに先端は大地を抉り地中へと潜行を始める。

「こうなのが、まさに根絶やしって事だな。」

地中を進むドリルワイルダーは、凄まじい勢いでツリードーパントの根を寸断する。大地とのリンクを断たれ急速に枯れ始めると共に、大樹の幹には下から上へと罅が入っていく。

「図体がデカけりや良いってわけじゃない。」
巨大化したツリードーパントを芯から貫いたドリルワイルダーが、
天高く伸びた大樹の天辺から大地へと着地した。

「ぐあっ…」

堪らず巨大化形態を崩すツリードーパント。

「お前に恨みは無いが…」

MAGNE!!

ドリルワイルダーから降りたイルは横のスロットを下に倒すとクウ
エイクメモリを引き抜き、マグネメモリを代わりに押し込みスロッ
トを押し上げた。

WILD・MAGNE!!

身体中の罫は消え失せ、全身が赤と青に染まる。

「メモリブレイクだ!!」

マグネメモリの入ったスロットを跳ね上げると、バックルがレの字
へと曲がり、全身に青い電撃が纏われる。

MAXIMUM・DRIVE!! MAGNE!!

ワイルドメモリの身体能力に合わせてマグネメモリの磁力操作で地球との反発を最大限に高めて天高く飛び上がったイルは、跳躍の頂点に達すると地球との磁力による引き付けを最大限に高め、両腕の爪を真下に向けてツリードーパントへ一直線に落下する。

「マグネダイブ！」

「へ？」

アツと言う間にイルを見失ったツリードーパントが、頭上の気配に気が付いた時には既に遅かった。

超高高度から超高速で鋭い爪を叩き付けられたツリードーパントは爆砕した。

シン

砕けたメモリと放心した男を見ていたはずなのに、ふと気が付けば、腰に巻かれたMAXドライバーへ手を伸ばしていた…

何故？

僕に彼と戦う意思はない。

勿論、シャドウにも勝手に僕に戦闘態勢を取らせる様な力は無い…

だけど、誰かが僕の頭に強烈に語りかけてくる。

「闘え…」

「危険の芽は早いうちに摘み採っておかねばならない…」 「アレは、お前に害をもたらす…」

イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ！

なにも、進んで自分から争いの輪になど入りたくはない。

しかし、僕の手が勝手にドライバーに挿さっているピンク色のメモリを抜いた途端、そんな気持ちはどこかへと消え去った。

もう、何も感じない…

先程まで胸の中に渦巻いていた戦いに対する恐れや、僕に戦いを強要する声への怒りは、跡形も無い。

全てがガラス越しの出来事であるかの様に…

沙都子

つい数秒前まで、私は退屈で無意味な日常に溜め息を吐いていた。

空都市民が一生をかけても手に入れる事の叶わない高価なアクセサリーやドレス、いま私が乗っている送迎用のリムジン…

どれもこれも私には有り触れたモノでしかなくて…、一般階級の人達には広過ぎるこのリムジンのスペースも、私にとっては窮屈な鳥籠の様にしか感じられない。

そんな時だった…

車内から見える景色の中に佇むアイツの姿を見掛けたのは…！！

間違いない。しばらく見ない間にだいぶ雰囲気が変わっていたが、梨花お姉様を苦しませたあの男の顔を私が見間違える筈も無い。

「影人>カゲト<…ッ！！」

私は余りの憎しみに思わず下唇を噛んでいた。

「お願いですわ、ここで降りして下さいませ。」

急いで運転手に車を止めさせて慌てて車を飛び出す！！

私は服の左袖を捲り、左腕の手首に巻かれたリストドライバーを眼前に構えると、懐から取り出した一本のメモリを取り出した。

INSANITY！！

そのメモリが内包する「狂気」の記憶が私を心地よく包んでいた

…

第3話「追跡者I/偶発的遭遇」（後書き）

ドーパント紹介

>メガロドン・ドーパント<

古代鮫メガロドンの力を持つドーパント

その獷猛さと俊敏さ、鋭い牙は地上でも健在だが、あくまでもMAXの最終調整試験用に用意された相手であった為、本気を出したMAXとの力の差は歴然だった。

水中戦だったのならば善戦出来ただろう…

>オーケストラ・ドーパント<

合奏団の力を持つドーパント

全身の楽器を一齐に鳴らす事により広範囲に破壊音波を放出するドーパント。

腕の弦による高周波ブレードにより近接戦にも対応しているが、元々が広域殲滅型であるのと体が繊細な楽器である為に実は耐久度はあまり高くない。

>グラスホッパー・ドーパント<

バッタの力を持つドーパント

凄まじい脚力によるフットワークを生かした素早い奇襲攻撃が持ち味だったが、その勢いが強過ぎていかんせん責め手が直線的にならざろうえなかった。

>ベアー・ドーパント<

野生の熊の力を持つドーパント

非常に頑健な身体と剛腕による怪力を誇る。

標準的に見ればドーパントの中でも動きは多少素早い方ではあるのだが、その体躯故に小回りが利かずにクロー・ドーパントに敗北を

喫する事となった。

> ツリー・ドーパント<

樹木の力を持つドーパント

触手の様に伸縮自在な無数の枝は、再生力も高い為に非常に厄介である。

大地から栄養を吸って巨大化形態となる事が可能な他、本編未使用ではあるが、地面に枝を潜行させたり、株分け等により複製体を生成できる。

尚、地中に潜行させた枝先を簡易的に本体に似せる事が出来るので、戦闘力は大幅に下がるが鼠算式に個体数を増やせる！！

ただし、上記の能力の使用においては個体間が常に接続状態であったり、生成に膨大なエネルギーを消費する為に根を張った場所から動けない事と、日の光を遮られると光合成が出来なくなり弱体化する事が致命的な弱点となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8174i/>

SkyCityStories-W-DarkHeroMAX&ILL

2010年10月14日11時57分発行